敬老の日 特集

敬老会のご案内

永年にわたり、社会・家庭に尽力された老人を敬愛し、長寿を祝う趣旨で今年も75才以上を対象に、次により敬老会を行います。

昨年について、4会場で行います。

■日時　9月15日(土) 午前10時30分
（受付9時30分）

■会場・区域
○小須戸地区　老人福祉センター
○矢代田、天ヶ沢、鎌倉
矢代田小学校体育館
○新保、竜玄、蔵町4・5
新栄町4・5、文京町2、
中央町4・5
新保研修センター
○横水地区（文京町1含む）
横水保育園

■該当者　明治43年3月31日以前生まれの方

㊟ 新保地区は、9月末の休日か、10月初めの祝祭日の予定ですので、よろしくお願いします。

伝えてください

おらの

楠原とよさん（72才）
（竜　玄）

私達は七名で「中クラブ」をつくって、昭和三十四年以来二十数年、毎月一回の会合をもって話合ってきました。去る十六日、大正末期の嫁の苦労話に花を咲かせました。以下それを要約します。

①年間、一・二度は日当一円五十銭の農作業で小遣いを得、その他正月とお盆に五円づつ、これが全収入。渡し舟の二銭、バス代の十銭も払えないこともあった。

②その頃の楽しみは、同輩の嫁同志が行きがかりに立話をしたり、羽生田の地蔵さま、後須田のお産の神様に子供を背負ってお参りに出かけるのが最高の楽しみで、温泉に行ったり、新潟見物、弥彦参りなどとてもできなかった。秋の収穫が終わると米を持ちよって渡辺家を宿に「出しあい」をして、コンニャクと卵の煮物を食べた味は、今でも忘れられない。家に卵があったが病気にならねば嫁の食べられるものではなかった。

③二・五日の労働を続けると、近隣話し合って半日の休暇をとることがあった。他の木戸の人々の働らく様子を横目で見ながら、半日の休養が最大の喜びだった。米の取り入れが終わると現金収入のための玉縄ない、米俵あみの作業が待っていた。

④お産の時でも、産まれる直前まで重労働に従事したし、産後三十五日間は重労働を免除されたが、早期から深夜まで嫁の仕事はきつかった。

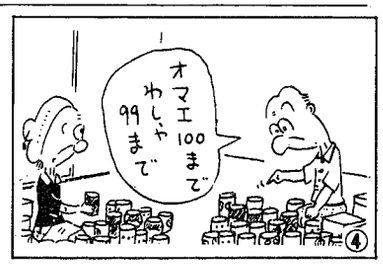
④家族の団らんに参加することは嫁のできないことだった。

寒い冬の夜、家族が赤々とたいた、火のまわりに楽しく話しあっているところへ、冷えきった手足を少し温めて寝たいと思っても、そこは嫁のたち入るすき間のない所だった。

新しい住宅、自家用車、農器具、豊かな食生活へと五十年間の急激な変化、全く夢のようです。この時代に若い者に伝えようとしても馬鹿馬鹿しいと一笑にふされてしまうだろう。

それで良いのだろうか。

私達は近頃、年老いて家族に疎外された不幸な人の話を耳にするようになった。老後の幸せのために、家庭の中で良いおばばになれるよう話し合っていく事の重大さを確認しあって話を終わった。



若者たちに

わーけとき

「ヘルストロンはやっぱ体にいい～ね。」と
おばあちゃんたち

九月十五日は敬老の日です。

時は移り、目まぐるしく変化してきた現代にあって、第一線を退いたとも思えるお年寄りです。しかし、お年寄りには若者にはない経験に裏打ちされた思慮深さや冷静に物事を見極める目があります。

そこで今月号では、二人の方から若い頃の思い出を語っていただきました。吉田一二さん(横川浜)は、「昔は、今のように若者が外へ出ていくことが少なくて、青年団活動が活発だった。」と友人の活躍や日常の生活について語ってくれました。

楠原とよさん（竜玄）は、お嫁に来ての苦労話を同じ年頃の友人と話しあったことを書いてくださいました。

――「歴史を変えようとする者は過去の歴史を大切にする。」――

この機会に、もっと多くの知恵と経験を若い世代に伝えていただきたいものです。

吉田一二さん（73才）
（横川浜）

このたび、役場の広報係の依頼で何か若い時の事を書いてくれとたのまれ、固辞したが横水方面の七十半ばの人から書いてもらいたいというので、安請けに軽く引き受け机に向かって考えてみると、二十才前後長煩いしたり、家庭の都合で青年団活動も積極的にできず、筆無精でメモ一つなく困ったと思った。

しかし、今になってことわるわけにもいかず、うろ覚えの事を書いてみる。

横川青年団では剣道が一番盛んで、山田信一さん、吉田徳三郎さん、池田国松さん等その他多士済々で選手が多かった。

今でも、伝統が続いている弁論部は岡田辰次さん、野崎金策さん、池田清六さん等活躍したと思うが、その後、一般に不振となった。陸上競技の方で長距離は、岡田丈平さん、堀内三太郎さん等、短距離は野崎金策さん、池田作一さん等目立った。

その他、各種目に出場したが惜しいかな目立った活躍ができなかった。各地区にも青年団があり競いあい、陸上競技では山通りと小向が強かった。剣道は新保・竜玄が強く横川と競いあった。苦労したのは、剣道の防具や竹刀のいたみがはげしいのでその補給である。村から補助もできないので川原の空地を開墾して二度芋や里芋を作って、その売上を防具などの経費にあてた。娯楽は映画ぐらいのもので、夕方花火の合図があるとこらえきれず出かけたものだ。四十銭か五十銭だった。カフェも一円銀貨があれば遊べた。そのお金はドジョウを取ったり、農作業の合間に土方に出たりしてつくった。

ドジョウ取りで思い出されるが、ドジョウつづは堀も多くあったし、田にもつけて結構取れたものだ。正月になれば、あちこちに寄って甘酒をご馳走になりながら、カルタ取りで夜遅くまで遊んだ。

自転車も、当時やっと誰も乗るようになった。今の自動車と同じようにどこの家でもあるようになった。それでも新車は、なかなか買えずに大部分が中古車だった。しかし、田の水廻りするにも乗れる道はなかったが、友達と自転車で弥彦参りをした時、しりが痛くなってつらかったことを覚えている。今の自動車の事を思えば夢のようだ。

小学校卒業して六十年、同級生が戦死したりしてめっきり減り淋しくなった。しかし、敬老会も近づいたし、残った人達だけでも寄合って楽しく過ごそうと思う。